



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail : daimao@travelmitra.jp)

ぼん子画

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

「インド芸能の世界 with 人間国宝」④

われらは羽田空港に集合した。ところが、どうしたことか、一人現れない。
(迷子になったのか?)

「今どこにいるのですか？」

「自宅にいますけど・・・」

落ち着いた声に、わが輩はことばを失った。出発の日を勘違いしていたのだ。さあ大変だ。読者諸氏よ。出発前のマイナス・ポイントだ。この結末はあとで述べよう。

搭乗口で待機していると、声をかけてきた御仁がいた。高野山大学の元研究員である。立教大学の研究者をつれてタイに行くという。東大某教授の研究会の助力を彼に頼んでいたが、一向に返事がこない。どうなっているのか、と思っていた矢先に彼にばったり会った。結論は、メールの読み違いであった。偶然に彼に会ったことで問題は解決した。出発前のプラス・ポイントである。

さあ、これで露払いはできた。出発だ！

使節団はまずブッダ・ガヤーに着陸した。

ブッダは、ここで悟りを開いた。T君は禅の在家修行者である。「悟りとは何か」が彼の長年の問題であった。

われらは何故訪れたのか。

1902年(明治35)岡倉天心がヴィヴェーカーナンダと共に訪れていたからである。当時大菩提塔はヒンドゥー教僧院の所領になっていた。大塔内にはリングが祀ってあった。天心の目的は巡礼宿の土地買収にあった。その交渉のためにはヴィヴェーカーナンダの力が必要であった。結局交渉は成立しなかった。その後天心はベナレスを訪れアジャンター石窟寺院まで足を延ばしている。

タゴールについて読者諸氏をご存知だろうから説明を要しないが、はてヴィヴェーカーナンダとは何者かを、この辺りで簡単に説明しておかねばならない。

彼は宗教的天才といわれたラーマクリシュナの教えのもとに出家した。彼を世界的に有名にしたのは1893年(明治26)のシカゴ宗教会議での講演である。植民地の無名の僧が発した高度な思想にアメリカ人は驚いたにちがいない。会議に列席していた日本の知識人も感銘を受けた。

アメリカの日本留学生ジョセフィン・マクラウド嬢が天心をインドに誘った。天心はベルル僧院でヴィヴェーカーナンダに会うことができた。彼の信奉者シスター・ニヴェディターは天心の著作「東洋の理想」の出版に寄与した。また彼女は天心をタゴールに紹介した。

ちなみに 1893 年（明治 26）5 月ヴィヴェーカーナンダは長崎に寄港、神戸で下船し陸路で横浜に向かっている。今年が 125 年目にあたり神戸の祝祭でわが輩もスピーチした。

前述したように、ブッダ・ガヤーには印度山日本寺がある。1970 年宿坊が建設された。わが輩も翌年に泊まったことがある。一宿一飯の恩義として本堂建設のためのセメント練りのお手伝いをした。

本堂での奉納公演は厳かに行われた。次は大菩提塔だ。最初菩提樹下を考えていたが、とにかく巡礼者が多く大混雑。そこで塔東の段上で奉納公演と献茶を行うことにした。

（ブッダは、ちゃんと聞いてくれたかな？）

久しぶりの大菩提塔だが、驚いたのは僧になるインド人が非常に増えたことだ。

地元の兄ちゃんが言った。

「坊さんになれば食えるからね」

ブッダ・ガヤーからラージギルに異動した。ブッダが法華経や浄土三部経を説いたといわれる聖地である。ブッダや弟子たちが修行した岩窟、精舎それに温泉もある。2 時間ほどだが、天心が来たという記録はない。当時は虎がでるジャングルなので、それを恐れたのか。

まず、ブッダが説法した霊鷲山で奉納した。御来光に感激していると、数百名の白衣の巡礼団が一行に並び合掌しゆっくりと登って来た。タイの巡礼団であった。

ブッダ・ガヤーで奈良の有名寺院の団参に出会った。その行程にびっくりした。ガヤーからコルカタまで夜汽車、博物館見学、デリーで博物館、そこから 2,700 キロ南下しケーララ州で水路巡り。さらにスリランカに渡り仏跡を訪れる行程である。

この違いは何か。

素朴なブッダ信仰と高尚な仏教理論の違いかと、わが輩は推測した。さて、どちらが生き残るのか。

さらに登って多宝山で献茶を行った。五十年近く酷暑に耐えて修行するご住職とわが輩は、ブッダへの献茶のおこぼれにあずかった。

苦勞して登ったあとの、お茶は最高だよ。読者諸氏よ。修行は苦勞だが、満喫感が待っている。

さあ、いよいよ本番だ。それよりもコルカタへの飛行機はきっちり飛んでくれるのかい？